第三話　御前試合

１．

　御前試合当日。
　その日の学園は緊張感ではなく、お祭り気分に満たされていた。ほとんどの生徒はと試合そのものには関わりがない。第三皇子と、共に来るであろう美人だと噂される皇女様の顔を見ることができ、眼の保養になるだけの催しだ。
　さらに市街地のにぎわいも祭りの空気を作り出していた。皇子と家臣団。街の外から大勢の人間が来る。商人たちは競うように商いを始める。
　その中でウィルは洋服を手にして、一人顔を強張らせていた。
「高い……桁間違えてるんじゃないか、三つほど」
　式典に出るならもう少し恰好をなんとかしろ、と教官に嫌みを言われたウィルは大事な試合の前だというのに、市街地の服屋に来ていた。
　平素、教官の嫌みも服装のＴＰＯも気にしないウィルであったが、出世のためには王族の前で無様はできない。一着くらい余所行きがあったほうがいいと思い買い物に来たのだが、服一枚の値段を見て途方に暮れていた。
「これ一枚で何年食っていけるんだ」
　何も考えずに入店したウィルだったが、貴族が集まる学園の城下町とも言える場所に出来た繁華街には高級店が点在している。
　ウィルがいるのはそんな貴族向けの一店だった。
「御前試合で賞金が出るわけじゃないんだよな」
　思案顔のウィルに服屋の店員が近づいてきた。
「お気に召すものはございましたか？」
　ウィルがそんな言葉使いで話しかけられたのは生まれて初めてだった。平民同士だと、店員と客とでもラフな言葉でのやり取りが普通だ。敬語で話しかけられても違和感がするだけだった。
「もっと頑丈そうなのがいいな」
「士官服のようなものでしょうか？　それでしたら、お取り寄せになりますが？」
「それだと間に合わないな」
　どうにも居心地が悪い。本来、ウィルの身分で入ることのできる店ではないのだ。ウィルの身なりでは入店した段階で追い出されて然り。
しかし、その事情は五日前に一変した。
御前試合の出場権を得て、エルフィやワンドと並んで顔が知られた。学園の外の人間はイベントごと以外の学園の内情に興味を持たないので、ウィルは二人と同レベルの地位の持ち主だと思われていた。

今や、追い出されるどころか向こうからすり寄ってくる。
「ああ。試合用の衣装ですね。お急ぎなら、ここにあるものに手を入れるということでいかがでしょうか？」
「それだと金が足りないな。四ケタほど……」
　ウィルは店員に聞こえないように呟いて思案に暮れた。持ち金がない。貴族でもないので実家に請求してもらうこともできない。しかし、店員からは絶対に逃がさないという雰囲気を感じる。ここで新しいコネクションを作りたいのだろう。
「だが、無い袖は振れん」
　ウィルがどうやって店員を振り切ろうかと考えていると、ベルの音が響いた。新しい客が入ってきたのだ。
「いらっしゃいませ」
　ウィルは店員が新しい客に対応している間に店を出ようとしたが、扉のほうへ足を向けたら動きが止まった。
「お久しぶりです。メアリー様。本日はどのようなご用件で」
　新に入店した客はメアリーだった。余所行きの格好をして、侍従らしき女性を連れていた。
「……ウィル、なんでここに」
　メアリーもウィルがいることにすぐ気が付いた。店員をそっちのけで、ウィルのほうを見ている。
「ちょっと、話いいかな？」
「俺のほうの用事は済んでいるが……」
　蚊帳の外に置かれた店員が、貴族同士のスキャンダルだと思ったのか、二人のやり取りに聞き耳を立てている。
「あいさつ回りがありますので、フォーマルなものを」
　ただならぬ雰囲気を察した侍従が、メアリーに変わり店員への対応をする。侍従はメアリーに目配せをした。その意味を察したメアリーはウィルを店外に誘導する。
「サイズは前回と同じで。ええ、身長もバストもそれ以外も、これっぽっちも成長してませんので」
　メアリーがすごい勢いで侍従のほうを見るが、彼女は知らないふりをして店員と衣装の打ち合わせをしている。主従関係の外でも親しい間柄の様であった。

　ウィルとメアリーは町はずれの高台にある人気のない広場に来ていた。
「任せちゃっていいのか？」
「高い買い物じゃないからいいのよ」
「あれでかよ……」
　ウィルが無駄に劣等感を刺激されて肩を落としている間、メアリーは高台の端から町の

様子を眺めていた。
　町を見下ろしているメアリーを、後ろから見ているウィルは既視感を覚えた。
「話というのは御前試合のことか？」
「うん。それもある。けど、私が一番知りたいのはウィルの事よ」
「俺がどんな卑怯な手段で人のスコアを掠め取ったかという話か？」
「ううん。それはエルフィから聞いた」
「む。エルフィのやつ、口が軽いじゃないか」
　少し考えて、ウィルはエルフィが試合の経緯をメアリーから聞いたと言っていたことを思い出した。もともと繋がりがあったのだろう。
「心配しないで。私にしか話してないはずだから」
「お前ら仲良かったっけ？」
　ウィルはエルフィとメアリーが秘密を共有できる間柄だったかが気になった。強化弾のトリックは今更、漏れて困る情報ではないが、日頃の様子からは少なくとも仲の良さは感じない。
「う〜ん。友達とはちょっと違うけど、前から話はしてたよ」
「驚いたな。どういう繋がりなんだ？」
　本気で目を丸くしているウィルの顔を見て、メアリーは深いため息をついた。ウィルのほうはそんなメアリーを見て、さては社交界というやつか、秘密クラブというやつか、などと呟いていた。
「話を戻していいかな？　私が知りたいのは、どうしてウィルがそこまでして上を目指しているのかということよ」
「……今更だな。いつも言っているだろ。実際、惨めなもんだぞ。底辺の生活ってやつはな」
　ウィルはいつも通りの答え。しかし、メアリーは首を横に振った。
「それは嘘よ。ううん、嘘じゃないけど、全部じゃないよね」
　高台に強い風が吹いた。風に巻き上げられた落ち葉が二人の間を舞う。
「なにを根拠に？」
　ウィルの切り返しを受けて、メアリーはうつむいた。反論の言葉がないわけではない。メアリーはウィルに表情を見せないようにしたまま言葉を紡ぐ。
「……だって、ウィルには戦いに勝たなくても上に行く方法があるじゃない」
「なんの話か分からないな」
　メアリーは口ごもった。それはメアリーにとってとても言い辛いことだからだ。加えて、態度からウィルがその方法について気付いていながら、知らないふりをしているということが確信できたからだ。
　戦い以外に上に行ける方法があると聞けば、普段のウィルなら、教えてくださいと切り返すはずなのに、話自体を無視しようとしたからだ。

「こ、ここの誰かと、け、結婚する……とか」
「そっとのほうが難しいんじゃないか。平民と結婚したがる貴族なんて聞いたことも無いぞ」
　メアリーはつっかえつっかえ言い辛そうにしている。それに対して、ウィルはあらかじめ用意していたようにスラスラと喋る。
「い、いると思うよ」
　メアリーはそれだけしか言えない。ウィルはメアリーの言葉に反論しない。するまでもなく、水掛け論になるとわかっているからだ。
　そのくらいのことはメアリーもわかっているが、もっとも有効な反撃をすぐにすることができない。それはとても勇気がいる言葉だからだ。
　しかし、言わなければ話が進まない。知りたいことを知ることができない。
　メアリーは必死の思いで言葉を口にしようとするが、声にならず口パクになってしまう。
「それだけならもう行くぞ」
　立ち去ろうとするウィルの背を見て、メアリーは追い詰められた気持になる。心臓が暴走を始めた。魔術を失敗した時のように血が熱くなる。口がからからに乾く。息がうまくできない。呼吸が浅く早くなる。
　ウィルが一歩踏み出す。その足音がやけに響いた。
「わ、私が……私はウィルのことが好きなの」
　さすがに、さすがのウィルもその言葉を振り切って進むほど非常ではない。しかし、振り向かない。ウィルは背中越しにメアリーの言葉を受ける。
「だから、教えて、ウィルのことを」
　ウィルは即答しない。何かを耐えるように、まっすぐ立ったままジッとしている。
　長い時間ではなかったはずだが、メアリーには時が無限に引き延ばされたように感じられた。
「俺は……」
　メアリーはウィルの一動一挙を見つめる。その全てが自身の行く末を左右すると感じていた。ウィルの、好きな男の源泉を知るために自分の大事な言葉をかけた。傍から見れば、ささやかなものかもしれないが、メアリーにとってのこれは戦争だった。
「俺は怖いんだ」
「……え？」
　メアリーはウィルが言ったことの意味が全く理解できなかった。
　今の流れで、どうして怖いと言う言葉が出てくるのか。まして、メアリーから見たウィルは恐怖という言葉とは無縁の男の子だった。
「俺はお前たちが怖いんだ。エルフィやワンドが、フーマやオリタが、レイスやカイトや、タケイ、お前のことだって怖い」
　ウィルの絞り出したような声で紡がれた言葉を聞いて、メアリーは呆然と彼を見つめる

しかできない。
　メアリーの見つめるウィルは震えていた。拳を握りしめ、恐怖によって小さく震えていた。
「強くなるために訓練をした。銃の研究もした。でも、余計に恐ろしくなるばかりだった」
　ウィルは研究の中で、貴族の間では、役立たずと恥知らずの象徴とされている銃がどれほどの工夫と研鑽との結晶であるかを知った。そんな強力な道具がエルフィやワンドの前ではおもちゃも同然。弾丸を防ぐことも、自身がそれ以上の威力を持った弾丸を放つことも、指ひとつ動かさずにできる。
「お前たちがほんの少しの気まぐれを起こせば、俺は簡単に殺されるのに一緒になるなんてできるはずがない」
　メアリーはただ立ち尽くす。いろいろ言いながらも、楽しそうにしていたウィルが同じ九組のクラスメイトにまで恐怖を感じていた。魔力の制御で落ちこぼれたことにより実家で疎外感を感じていたメアリーにとって居場所だった九組。それは他の仲間たちも似たり寄ったりだったはずなのに、その中心にいたウィルが正反対のことを思っていた。
　メアリーは足元が崩れ去ったような、自分の今までが全て無くなってしまったような気がした。
　そして、はたと気付いた。今、ウィルの言葉で自分の世界観があっさり崩れたように、自身の命があっさり失われるということが起きるかもしれない。ウィルはずっとそんな気持ちだったのだ。
　その気付きは、メアリーに今すぐ部屋に帰って布団の中にでも引きこもってしまいたいという衝動を引き起こした。
「ウィル、最後にひとつだけ教えて」
　メアリーは震える声で問いかける。
「だったら、どうして戦う道を選んだの？」

２．

　きっと今日、寝坊した人間はいないだろう。
　第三皇子の行列が姿を見せたのは商人たちが店を開ける時間だったが、その頃には通りは見物人で溢れていた。
「すごい人ごみ。この街にこんなにたくさん人がいたんだな」
　九組のクラスメイト達と見物人の人ごみに紛れていたレイスが落ち着きなく辺りを見回した。
通りの街の外へ向かう方向から歓声が響いてくる。行列の先頭を進む騎兵の姿が見えた。鎧の代わりに派手なマントを羽織った騎兵は、手綱を握るのとは反対側の手に宝玉をあしらった杖を持っている。

王族ともなれば、付き人も貴族の魔術師で固めている。
「ウィルのやつ、これの前で戦うのか……」
「おい。アイツの話はするなよ」
「ああ。悪い」
　クラスメイト達に睨まれたレイスは首をすぼめて、人ごみの後方に退散した。
　人垣を抜けた先にはメアリーがいた。クラスの輪に入らず一人で佇んでいる。
「こんなところにいたのか。せっかくのパレードなのに見なくていいのか？」
「うん。私はいいよ」
　メアリーは覇気のない表情で地面を見ている。体調が悪化したのかと心配になるくらいに暗い表情だ。
「ところで、ウィルと話はできたのか？」
「……ウィル」
　その名前を聞いて一層表情に影を作るメアリーを見て、レイスはクラス内で流れている噂が正しいのだと思った。
　成績発表以降、ウィル叩きで持ちきりになっていた九組の中で、メアリーは一人だけウィルを擁護していた。折を見て自分が話をつける、と言っていた。その数日後、突然こんな調子になった。メアリーの様子を気にした女子たちがレイスと同じ質問をしたが、同じような反応をされたらしい。
　それで、さてはウィルとなにかあったな、との噂がクラス内で流れていた。
「おや。メアリー、こんなところにいたのかい？」
　人ごみの中でも、よく通る声と見失わない存在感を持つ少女。エルフィは御前試合を控えているというのに平時と変わらない余裕のある態度で現れた。
メアリーはぼんやりとしていてエルフィにすら反応しないので、レイスが対応することにした。
「エルフィ、何しにきやがった……とでも、言えばいいのか？」
「君はウィルの仲間の……えっと、いたのか？　と言ってほしいのかな？」
「いや。言ってほしいわけじゃない」
　レイスは直接エルフィと会話するのは初めてだったと気が付く。今まで、雲の上の存在だと思っていた少女は話してみると話しやすいやつだった。
「メアリーは落ち込んでいるみたいだな……ふふん、抜け駆けなんかをするからだ」
　メアリーの肩が撥ねた。メアリーは冷や汗を流しながらエルフィを見た。
「な、なんで、わかったの？」
「そりゃ、わかるさ。僕だって女だよ」
「うう……」
　一人話についていけないレイスだったが、この二人が絡んでいるならやはりウィルの話だとう、ということはわかったので口を挟まないことにした。

「エルフィはわかってたの？　ウィルが私たちのことを……」
「まあね。僕はしょっちゅうそういう目で見られるから、ウィルは隠そうとしていたみたいだけど」
「はあ……私、なにやってたんだろ」
　メアリーはますます落ち込んでいく。
「後悔しても仕方ないだろ……とは言え、口で言ってもどうにもならないだろうけどね。今は好きなだけ落ち込めばいいよ」
　街の入り口の方角から一層大きな歓声が聞こえてくる。
「どうやら第三皇子様がいらしたようだ。僕は試合の準備に行ってくるよ」
「うん。頑張ってね」
「それは皮肉のつもりかな？」
　エルフィの言葉に皮肉を言ったつもりのなかったメアリーは首を傾げる。
「だってそうだろ。僕らとしてはウィルに一度でも勝ってもらった方がいいのだからさ」
「それはそうだけど……？」
　メアリーはエルフィの言葉に賛成しつつも意図を測り兼ねた。九組の仲間たちのことを考えると複雑だが、ウィルに勝ってもらいたいと言う気持ちはもちろんある。しかし、エルフィの言葉からはただ気になる相手を応援したい以上の含みを感じた。
「頂点三人の一人でも倒せばウィルの恐怖もなくなるんじゃないかな」

３．

　銃身を折りたたみ、薬莢を捨てる。左手で新しい薬莢を詰め込み、引き金を引く。
　装填したのは空の薬莢だったので、引き金を引いても小さな金属がぶつかる軽い音がしただけだった。
「この辺が限界か」
　ウィルは御前試合の出場者にあてがわれた待機室で最後の練習をしていた。
　弾丸を再装填する操作は一切のよどみなく行われる。熟練と呼べる手際だが、魔術師相手では大して意味のない力だ。魔力で強化された身体能力なら切り込めるくらいの時間はかかっている。加えて、そもそも弾が効かない可能性が高い。
　今更こんな練習をするくらいなら体力を温存しておくべきだが、気分が落ち着かずジッとしていられなかった。
　ソワソワした気分を落ち着かせるために反復練習を繰り返す。
「なんか、いつもこんなことばかりしているな」
　扉をノックする音が聞こえた。
「試合の時間はまだのはずだが……」
「ウィル、入ってもいいかな？」

扉の向こうから聞こえたのは知った声だった。
「エルフィか。好きにすれば」
「では、遠慮なく」
「こんな時に何しにきやがった」
いつもの憎まれ口も今回ばかりは正論だった。今日中には戦わないとはいえ、試合前に相手の待機室に行くなど闇討ちか、八百長の相談か、と勘繰られても仕方ない。
「家のものがうっとうしくてね。逃げてきてしまったんだよ。君のところは誰も来ていないのかい？」
「農家に休日なんてないからな」
「とかいいつつ、君のことだから手紙も書いていないんだろ。連絡くらいしてあげればいいじゃないか」
「なぜわかった」
肩を揺らして笑うエルフィを無視して、ウィルは練習を再開する。
「僕が聞くのもなんだけど、一人でも勝てそうな相手はいるのかな？」
エルフィの話を聞いているのかいないのか。ウィルは黙々と練習を続ける。時計の針が進むような音が何度か響いた。
「俺が勝てる可能性があるとすれば……」
「言っておくけど、僕は手加減しないぞ」
「うるさいよ。言わなくてもわかるよ。お前一体俺のことなんだと思ってる」
一息にまくし立てて息切れしたウィルは戦う前から肩で息をしていた。
「……じゃなくて、ワンドだよ。一番勝てそうなのは」
「それはワンドの能力を知って言っているのかい？　ワンドの結界の防御力は僕以上だ。ありったけの火薬を使っても突破できないぞ」
「だから、勝てる。あいつの能力は防御に偏っているからな」
ウィルは実弾を銃に装填した。次にベルトを体に巻きつける。ベルトには弾丸をストックするためのホルダーが付いている。
「随分たくさん用意したな。君の魔力では一発作るのも一仕事だろうに」
「おかげで一発あたりの威力が落ちたよ。それにただの弾丸も混ざっている」
「ますますわからないな。それでどうやってワンドの防御を突破するんだ？」
「突破なんかしないさ」
エルフィは首を傾げる。まさか勝負を投げてしまったのか。それにしてはウィルは重装備すぎる。
「さし勝負なら最初からこれしかない。貴族と平民の差なんて魔力だけなんだ。やってやるさ」

４．

第三皇子インクレッドは学園の貴賓室へ通された。部屋の中には大きな鏡が設置されている。
「直接試合を見ることはできんのか」
「流れ弾が飛んでくる可能性もありますので」
魔術師たちの戦いでは大砲クラスの遠距離攻撃が盛んにおこなわれる。護衛が付いているとはいえ、貴人を戦域に近づけるには危険すぎる。どの道、フィールドが広すぎるので、遠隔視の魔術を用いて中継をした方が試合がよく見える。
「第一試合はワンドとウィルというものか。ワンドのことは知っている。あれの父親とは王宮であったからな。しかし、ウィルというのは何者か？」
インクレッドは部屋の隅に待機していた学園長に話を振った。学園長は問題児の出自を尋ねられて答えあぐねる。
「え、ええ、あれはミズ村の出の者で貴族ではありません」
「ほう。では、第一世代の魔術師なのか？」
「は、はい。そうです」
「そうか。そうか。その者いかなる戦いをするか楽しみになって来たぞ」
インクレッドは試合を見る前から満足げな顔をしてうなずいている。学園を作ったのはこのように魔力の差をひっくり返す使い手を育てたかったからなのだから当然だ。
しかし、インクレッドはウィルがどのように勝ち進んだかを知らない。
学園長も具体的な方法を知っているわけではないが、まっとうな方法ではないことは察している。インクレッドの表情を見て、青ざめていった。
「頼むから皇子の機嫌を損なう真似だけはしてくれるなよ」
学園長がついこぼしてしまった本音を耳にしたものは幸運なことに誰もいなかった。

５．

演習場の空に煙弾が打ち上げられた。
御前試合と言えど、ルールはいつもと変わらない。ウィルはいつも通りの煙弾をいつも通りの演習場で見上げていた。
「始まったか」
ウィルは一人銃を握りしめる。
いつもと違うのはウィルが一人だと言うことと、試合の重要性だ。大げさではなく、この試合の運びしだいでウィルの人生は変わる。
出世のチャンスとか、負け犬根性を捨てるとか、曖昧なものではない。名前が売れると言うことははっきりと環境が変わることだ。
ウィルは御前試合の出場決定以降の数日の間でそのことを実感していた。

「もう負けるのは御免だ」
　ウィルは六組との演習でも利用した森に向かって走り出した。

　ワンドは演習場のウィルがオリタと一騎打ちを繰り広げた辺りで、煙弾を見上げていた。
　ウィルに対して、ワンドは試合に対してなんの感慨もわかない。御前試合も授業として行われる演習と大差ない。いつも通り戦い、いつも通り魔力順に結果が決まるだろう。自分一人で広い演習場から敵を探さなければならないのがひどく面倒、というのが普段と違うところだと思っていた。
「早く終わらせよう」
　ワンドはほとんど植物が自生していない演習場に不自然にできた森のほうを見た。
　どうせ、あれを利用する気なのだろう。
　ウィルの現在位置に辺りをつけたワンドは空中へと飛びあがった。

　ウィルは魔力を使わず、肉体の力だけで走っていた。歩兵の速度そしては十分な進行速度だが、遠隔視の魔術を使い離れた位置からの映像を見ていた者たちにはのろのろ動いているように見えた。
「始まった」「どうせ瞬殺だろ」「さっさと終わればいいのに」
　御前試合に出場しない学園の生徒たちは式典などに使う大講堂に集められていた。
　壇上にはミラの魔術により、試合の様子を映した映像が流れている。しかし、ほとんどの生徒たちは映像に興味がないようだった。
　想定外に御前試合に出場したウィルだが、どうせワンドには勝てないだろう。お互いが接触した瞬間にウィルが倒されて終わりだ。のろのろ動いて、結果のわかりきった試合を引き延ばすのは止めてほしい。
　それが大方の見方だった。
「ウィルは勝てると考えているのか？」とタケイ。
「さあね。弾が効かないなら無理だと思うが、本人はどう思ってるだろうね」とレイス。
「レイスはウィルに勝ってほしいのか？　俺は正直、未だに納得していないのだが」とカイト。
「う、うううん。いや、俺はどっちでも……」
　先ほどのメアリーとエルフィの会話を聞いてしまったレイスはウィルに負けてしまえとはっきり言えなくなっていた。はっきりとしたことはなにもわからないが、並々ならぬ想いがあることが感じられたからだ。
「ただ、一度くらいはアイツの話を聞くべきじゃないかと思う」
　レイスの最後の台詞は突如上がった歓声のせいで誰にも聞かれることがなかった。
　映像に注目が集まる。
　視線の先ではワンドが鳥よりも高く空に舞い上がっていた。

　ウィルが考えた作戦を実行するには、遮蔽物の多い森の中で隠れながらが一番いい。いち早く森に到達する必要がある。それなのに身体強化の魔術を使わないのは、今までの対戦の中でワンドが索敵の魔術を使わないことがわかっていたからだ。ウィルは見つかるまで時間がかかるとタカをくくっていた。
　鳥の鳴き声が聞こえた。
　ウィルは釣られて上を見る。
　街の中でもよく見る鳥が頭上を旋回していた。三匹飛んでいるが、その中の一匹がやけに大きい。
　その一匹が光を放った。星の光程度の小さな光だった。一度だけでなく、何度も点滅する。
「なんだ？　あの鳥……じゃない」
　ウィルは空を見るのを止めて、全力で走り出す。
「まずい。見つかった」
　一度だけ空を振り返った。光は先ほどより大きくなっている。飛んでいるなにかが近づいてきている。
「あの野郎、何で飛んでるんだ？」
　使える魔術の種類には制限があり、それは魔力の大きさと同じく生まれつき決まっている。
　ウィルの調査では、ワンドの能力は結界に偏重している。誰もが使える壁になるだけの結界だけでなく、いろいろな効果を付加した結界が張れる。手をかざさすに結界を展開できるし、離れたところに出現させることも可能。
「————だが、それだけのはずだ。飛ぶなんて、できるはずがない」

　ワンドは足元を見た。
　地表が遠すぎて、探している相手は見つからない。
　しばしの間、落ちるに身を任せて高度を下げる。落下速度が上がり切る前に、自分の下方数センチと足の裏に結界を張った。二つの結界には接触したものを弾き飛ばすという能力を付加してある。
　ワンドは結界で守られた足で、もう一枚の結界を蹴った。
　結界は互いに反発し合って、ワンドの体を上昇させた。
　それを繰り返し、少しづつ高度を下げていく。
「見つけたぞ、落ちこぼれめ」
　ワンドは結界を解除して、ウィルの頭上をめがけて落ちていく。

　理由はわからないが、ワンドは飛んでいる。そして、上空からウィルを探していた。遮

蔽物のない平原で上から見下ろされたのではすぐに見つかってしまう。
　ウィルはとにかく走る。格上相手に真正面からぶつかるわけにはいかない。
　しかし、森へはまだ距離がある。ワンドが下りてくるまでにたどり着けるようには思えない。
一か八か一発撃つか。
振り向いて、上を見上げる。
月が見えた。否、星程度にしか見えなかった結界の光が近づいて、月に見えるくらいに大きくなっただけだ。
月は次第に大きくなる。
「……なんか、でかすぎるような気が」
　ワンドの体がやけに小さく見える。結界のサイズがワンドの体を覆うだけにしては大きすぎる。
　ウィルの背筋に寒気が走った。
　結界と言えど、魔力の塊。そして、銃弾を防ぐ強度がある。それが上空から落下してくればどうなるか。
　ウィルは足に魔力を込めて、本当の全力で走った。もう出し惜しみをしている場合ではない。相手は初手から決めにかかっている。大規模な攻撃で早々に決着をつける気だ。
「やばい。やばい。やばい」
　ウィルは今にも攻撃が来ると思い走るが、予想に反して、その気配がしない。だが、安心はできない。遠いと言うことは、その分結界は実物より小さく見えていたはず。予想よりも大きな攻撃が来るということだ。
　森まで数メートル。
　ウィルが逃げ切れるかと思ったとき、強い追い風が吹いた。
　猛烈な風圧でウィルの体が持ちあげられた。
　自然に発生した風ではない。ワンドの落下攻撃により発生した衝撃波だ。直撃しなかったことを有り難がれるような勢いではない。ウィルは吹き飛ばされて地面に叩き付けられた後も、地面を転がらされた。
　ウィルの背後に干からびた池のようなものができていた。
　ワンドの攻撃により地面がえぐられた結果だった。
「くそ。やりやがったな」
　鳥が鳴かなければ直撃だった。ウィルは相手の強さに脅威を感じるよりも、偶然に攻撃を回避できた幸運を強く意識して士気を維持する。
「ツキは残ってる。まだ行ける」
　ウィルは銃を強く握りしめて、森の茂みの中に身を隠した。

　ウィルを見失ったワンドは敵の作戦だとわかっていながら森に入った。相手が何を企ん

でいようとワンドにはエルフィでさえ手こずる防御力があるのだ。不意打ちだろうと、待ち伏せだろうと仕掛けてくればいい。向こうから来るならむしろ手間が省ける。
　一方のウィルは茂みの中からワンドを見つけていた。見つけられる前に相手を見つけられて一安心したが、気を緩めてはいない。まだこれから何度も綱渡りをしなければならないのだ。
　ウィルは不意打ちを仕掛けるつもりだった。結界の攻略法で最初に思い付いたのが、不意打ちにより結界を張る前に倒してしまう方法だ。まず第一撃は奇襲でいく。
　だが、ウィルが銃を構えてワンドに狙いをつけたその瞬間、ワンドがウィルのほうを見た。
　ウィルは身を固くした。緊張で手汗が滲む。
（……ばれたか）
　逃げ出して再び身を隠すか、様子を見るかで迷う。
　ワンドはすぐに顔を別のほうへ向けた。
　ウィルを探して、辺りを見渡していた途中で偶然ウィルの潜んでいる方に顔を向けただけだったようだ。茂みの中のウィルには気付いていない。
　ウィルはワンドが背中を向けた時、後頭部に狙いをつけて引き金を引いた。
　発砲音で位置はばれただろうが、弾丸が到達するより先に対応ができるはずはない。弾丸はワンドへ向かい真っ直ぐに飛んでいく。
　しかし、弾丸はワンドに到達する前に結界に阻まれて弾き飛ばされた。ワンドが振り向く。ウィルのほうへ向けて手をかざす。
　魔力弾を撃つ気だ。ウィルは茂みから飛び出して全力で逃走した。
「完全に不意打ちだったはずだぞ。何で気づかれた？」

　ワンドは三度死角から放たれたウィルの弾丸を結界で防いだ。
　ワンドは銃声のした方向に視線を走らせてウィルを探す。見つからない。茂みの奥に隠れたのかと思ったが、額より少し上のあたりで再び結界が展開して銃弾を弾いた。
「上か」
　見上げると、木の枝の上で銃を構えているウィルを見つけることができた。
「よくやるよ」
　ワンドが反撃をする前に、ウィルは木から飛び降りて即座に逃走する。躊躇わず背中を見せるのは迂闊ともとれるが、素早い行動のおかげでワンドの攻撃が始まる前に障害物の向こう側へ隠れることができていた。

　ウィルはワンドが追いかけてこないことを確認すると、弾丸の補充を始めた。弾帯から強化弾を取り出し、一旦手を止めた。少しの間、考えて、強化弾をしまい普通の弾丸を補充した。

「どうやってこっちの攻撃を探知したのか確かめないと」
　ワンドがウィルの位置を掴んだのは発砲の後だ。それはワンドの反応を見ればわかる。なにかしらの魔術で探知を行っていたのなら、ウィルが撃つ前に先制攻撃を受けていたはずだ。
「本人の意思と関係なく発動……判定機と同じ自動防御」
　ウィルは口元にだけ笑みを浮かべた。
「好都合だ。もともと本命はこっちだしな」
　通常の弾丸を弾帯の取り出しやすい位置に移動させて、ウィルはワンドを探して森の中を走り出す。

　ワンドは森の中で植物の密度が低い場所に移動した。敵を発見しやすくするためではなく、発見されやすくするためだ。防御に絶対の自信があり、相手より自分が格上であるという確信のあるワンドは奇襲を受けることになっても相手から出てきてもらった方が、手間が省けると思っていた。
「さて、次はどこから仕掛けてくるやら」
　茂みの中、枝の上。次々と手を考えてくる工夫の多さだけは感心する。
　そう思っていたので、次のウィルの行動は返って意外に思えた。
「往生せいやあああ」
　ウィルは正面から大声を出して突っ込んできた。
　ワンドが反撃の構えを取る前に二連射。弾丸は結界に阻まれる。撃った直後にウィルは転身して茂みへ身を隠す。
　反撃の機会を見逃したワンドはもう一度ウィルを待ち受けるためにその場に留まる。

　ウィルは弾丸を補充しながら、先ほどの小競り合いの検証をする。
「なんで反撃してこなかった」
　ウィルの第二の策は持久戦に持ち込むことだった。とにかく攻撃回数を稼いで相手に結界を使わせ、魔力切れを狙う。手持ちの弾丸には限りがあるからわざと反撃させて、消耗を早くさせる。
　最早、作戦と呼べるかも怪しいようなアイデアだが、十分な準備があれば成立する可能性はある。
「本来なら人海戦術でやるもんだけどな」
　クラスメイト達の顔が浮かぶ。次いで、彼らの能力を組み合わせた持久戦のプランが浮かぶが、詮のないことと切り捨てる。
　ルールの穴を突いた方法で昇格すれば、仲間たちと関係が悪化することはわかっていた。それでも、上に行くことを自分で選んだのだ。今更、頼るどころか言い訳の余地すらない。
　ウィルの思考はワンドの攻略に戻る。

　反撃を誘発したつもりだったが、相手からの攻撃はなかった。いきなり正面突破に切り替えたので面食らったのかもしれない。こっちの弾丸が切れる前に魔力を無駄遣いしきってもらわなくては困るのだ。
「もう一度、やってみるか」
　ウィルは茂みから飛び出して、ワンドに銃を向ける。
二発撃った後、ウィルは足を止めた。ワンドの様子を伺う。互いの距離は約十メートル。魔力弾による射撃が常套手段だと思う。しかし、魔力による身体強化を行えば一足一刀。
　回避のため、ウィルは魔力で身体強化を行う。
「どっちだ？」
　ワンドの反撃はどちらでもなかった。足元に二枚の結界を張り、反発力で跳ぶ。試合の序盤で見せた方法と同じやり方でウィルに肉薄する。
「何考えてやがる」
　ウィルは身を屈め、突撃してきたワンドをやり過ごす。反発力で弾かれただけのワンドは途中で止まることも方向を変えることもできない。外れた銃弾のように木に激突した。ぶつかる直前に新しい結界を張ったので、ワンドは無傷。ぶつかられた木のほうが倒れた。
「なんで撃ってこない」
　エルフィの魔術により生み出されたために通常より頑丈に育った樹木をなぎ倒す。今の攻撃の威力は十分に脅威だ。しかし、魔力弾を撃つより効率のいい攻撃には思えない。
　ウィルは試合が始まってからのワンドの行動を思い出す。開戦直後の空襲のときもなぜか魔力弾を撃ってこなかった。上を取ったのなら空爆すればウィルが逃げ延びることはできなかった。巨大な結界で押しつぶすなど回りくどい方法を取る必要はなかったはずだ。
「撃たない……いや、まさか、撃てないのか」
　ウィルが考えている間に、ワンドは体勢を立て直す。先ほどと同じ攻撃。ワンドは矢のように跳ぶ。
　ウィルは真横にステップ。交差する瞬間に魔力で作った剣――だと、ウィルが思っているステーキナイフを差し込もうとする。
　ワンドはすかさず反発力を付加した結界で防御する。
結界の反発力により、ウィルは弾き飛ばされた。勢いよく跳ばされたが、受け身を取りダメージを軽減する。
ウィルはワンドの第三撃が放たれる前に立ち上がり逃走する。

ウィルは周りよりも一回り太い木に背を預けて息を整えていた。ワンドが同じ攻撃しかしてこないなら、これを背にしている限り不意打ちで倒されることはない。
呼吸はすぐに落ち着いたが、脈は速いままだった。ウィルは高揚していた。持久戦など苦し紛れの一手だったが、奇跡的にうまくいっている。さらにここに来て、敵の意外な欠点が浮かび上がってきた。

本当に勝てるかもしれない。
銃を握る手にも力が入る。ウィルは再度の攻撃のために飛び出した。

ワンドはもう何度目になるかわからないウィルの攻撃を防いだ。
「やれやれ。うっとうしい奴だ」
　ため息をついて、ウィルが走り去っていった方を見遣った。大方、こちらの魔力切れを狙っているのだろう。無駄なことだ。こっちは丸一日でも結界を張り続けることが可能だ。
「だが、我慢比べに付き合うつもりはない」

　ウィルは残りの銃弾を確認する。正確な数を数えるほどの余裕はないが、すでに半分ほど使っていることはわかった。敵のほうは疲弊した様子すらない。このままいくと、こちらの弾切れのほうが早いだろう。弾が切れれば、別の攻撃手段に切り替える必要がある。そうなれば、ウィルの負担は大きくなる。
「上等だ。丸一日だってやってやるよ」
　ウィルは自らの頬を叩いて気合を入れ直す。どれだけ大変だろうとも、耐えればなんとかなるのならやりきってみせる。今まで、バカにされても、報われなくても耐え続けてきたことを思えば、試合の一つくらいはほんの小さな一歩だ。
　ワンドは移動していない。ウィルはワンドの正面からの何度も繰り返した攻撃を行う。ワンドの攻撃力がウィルの見立て通り極端に低いのなら、敢えて正面からの攻撃をして反撃させるのがウィルの作戦だ。
　後で考えると迂闊だった。同じ行動を何度も繰り返して敵が対応してこないわけがないのだ。
　木の影から飛び出し、ワンドに突撃したウィルはなにかに躓いて転倒した。銃を地面にぶつけないようにしたため、顔面から落ちる。
　ウィルは敵を前にして、つまずいて転ぶなどというあり得ないミスを犯したことが信じられない。本来なら即座に立ち上がって回避行動を取るべきだが、足元の確認を優先してしまった。
　躓いた地点に極小の結界があった。
「こんな手が……」
　すぐ側で足音。ウィルは何も考えずに、横へ転がった。先ほどまで頭があったところをワンドの足が通過した。
　ウィルは立ち上がり、茂みの中に逃げ込もうとするが背後に現れた結界に進路を阻まれる。
「しまった……」
「終わりだ。落ちこぼれ」
　ワンドは拳を結界で覆い、ウィルの腹を殴りつけた。当然、反発力を付加してある。ウ

ィルの背後に出した結界はすでに解除してあったので、ウィルは爆風で煽られたように吹き飛ばされた。
　ウィルは背中から木にぶつかり、地面に落下した。背中をぶつけたせいですぐに立てない。腹を殴られたせいで激しくせき込む。
「妙だな。なぜ判定機が作動しない」
「へ、お前のパンチがへぼすぎるんだよ」
「そうみたいだな」
　ワンドは倒れたままのウィルの脇腹を蹴りつけた。柔らかい脇腹に、ブーツの固い爪先が突き刺さる。
「……ゴホ」
「さて、どういう手を使ったんだ？」
　ワンドはウィルの腕を掴んで、その指先を見た。
「……なるほど。落ちこぼれが思いつきそうな手口だ」
　ウィルの指先には判定機がはめられていなかった。途中で外したのか、初めからつけていなかったのはわからないが、装備していなければ装備者を守る結界が発動するはずはない。判定機が作動したら失格というルールである以上、この状態なら攻撃を受けても死なない限りは戦い続けることができる。
「ルールブックにはずっとつけてなきゃいけないなんて書いてなかったぜ」
「またそれか。確かに装備については明記されていない」
　ワンドはウィルの手を放した。ダメージが溜まっているウィルは重力に引かれるままに落下する。
「これに限らず演習のルールには穴が多いとは俺も思う。だが、その隙をついて勝利を掠め取っても意味はない」
「そうなのか？　戦術を学ぶ学校だけに、わざと利用できる隙を残したのかと思ったぜ」
「よくもぬけぬけと。審議に掛けられたら、そういう申し開きをするつもりだったのか。確かに王族の名誉に配慮すれば、無下にはできない言い分だ」
　ワンドはウィルの言い分を認めつつも不愉快そうな顔をした。
「勝負の世界だ。隙を見せた方が悪い」
「ここのルールが曖昧なのは、ここで戦うのが貴族だからだ。名誉を重んじる心があれば、明文化されたルールは必要ないんだよ」
　お前のようなやつがいるほうがおかしい。
ワンドは言外にそう言った。その台詞はウィルの反骨精神を煽った。
「ハッ。卑怯者はお前だろ」
「どういう意味だ？」
「お前の実力は俺がよく知っているということだ」
　ワンドは出かかった言葉をかみ殺した。歯を食いしばったワンドの表情を見て、ウィル

は自分が図星をついていることを確信した。
「よく一緒に走ってたからな。四組のワンド君とは」

　すでに懐かしく思うほど前の話ではあるが、ウィルとワンドは共に自主練をしたことがあった。
　入学当初のワンドは四組に入れられていた。家柄の良さで言えば、一組クラスと言われていたのに四組にしかなれなかったワンドはかつて嘲笑の対象だった。
　そんなワンドと、第一世代で落ちこぼれのウィルは通じるところがあったのか、互いに競い合い高め合う良好な関係を築いていた。
　しかし、ある時を境にワンドの階級が急上昇する。
　明らかに以前より魔力が強くなっていた。
　通常あり得ないことだが、そこに疑問を持つものはなかった。魔力が後天的に向上することはないとされているが、持っている魔力をなんらかの事情で使えないということは少なからずある。
　ワンドもその類だと思われた。元から家柄にふさわしい才能を持っていたのだと周囲はそう判断した。
　やがて、ワンドは一組に編入される。
　ウィルとの交流が無くなったのはその頃だ。ワンドが一組に入って、次にあった時にはあの見下した態度になっていた。

「練習試合とかもしたからな。お前がメアリーとは違うことはわかってるんだ。そして、なぜか結界以外の魔術が使えなくなってる。理屈はわからんが、なにかしらのチートで魔力を底上げしたんだろ」
「そういう禁術があるとして俺はそれをどこで手に入れた？」
「お父さんの秘密の仕事は禁術の管理じゃないのか？」
　推論に推論を重ねただけで証拠はないが、起きたことに説明をつけようとした時これ以外思いつかなかった。
「どうせ証拠なんてないのだろうが……」
　ウィルはワンドの瞳から感情の光が抜けたことを見逃さなかった。負けてばかりで、危険に敏感になったウィルの直感が危機を告げた。
「家ぐるみの不正はばれたらことだ。判定機をつけていないならちょうどいい。ここで事故に見せかけて――――消す」
　ワンドは懐から銃を取り出した。ウィルの使う銃に対して随分と銃身が短い。フォルムも全体的に丸みを帯びており、材質も鉄ではないように見えた。火薬を使った銃ではないように見えるが、この流れで取り出したのならイミテーションということはあるまい。
　ウィルは魔力で身体能力を強化する。持久戦のための温存など考えない。なりふり構わ

ず、逃走する。
　だが、その試みは失敗する。
　光の弾がウィルの肩を貫通した。
　ワンドの放った弾丸はウィルの体を貫通した後も直進。地面か樹木に着弾した際に魔力の収束が緩んだのか爆発を起こした。
　ウィルは爆風に煽られ、またしても地面に倒れる。転倒の衝撃が傷に響く。激痛を歯をくいしばって耐え、出血を止めるために傷口を押さえる。
「魔力弾は使えないはずじゃ……隠してたのか？」
「いや、使えない。お前の推理通りだよ。あれは自分の中の可能性を対価にして魔力を上げる魔術でな。俺は魔力の使用方が限定されている。結界しか使えない」
「だったら、今の攻撃はなんだ？」
　ウィルが最初に考えたのは自分と同じ方法で作った強化弾だ。魔力の注入を誰かに変わってもらえば、魔力がなくとも一組並みの魔力弾が放てる。だが、学園の演習に持ち込んでいる以上、自分の魔力を使わないと意味がないはずだ。ワンドの言葉通り、結界しか使えないなら今の攻撃に説明がつかない。
「この銃は持ち主の魔力を強引に吸収して、攻撃力に変換する術式が施されている。魔力さえあれば、魔力弾が苦手な魔術師でもこの威力を出せる」
　防御に偏っている故に格上であるエルフィ以上の防御力を持つワンドが、さらに最上級の攻撃力まで備えた。
　ウィルが勝利する可能性は、下馬評のとおり無に近いものになった。
　だが、ウィルはここで折れるわけにはいかない。
「そこまで明かしたからには逃がしてくれないよな」
「当然だろ」
　ワンドは銃口をウィルに向ける。引き金を引かれる前にウィルは手のひらサイズの球体をワンドに投げつけた。
　ワンドが球体を結界で防ぐと、球体は濃密な煙を発生させた。
「小細工を」
　ワンドは銃を連射する。魔力弾の威力で煙を吹き飛ばした。
　しかし、煙が晴れるころにはウィルの姿は見えなくなっていた。

　二転三転する試合の展開により講堂は騒然となっていた。
　ミラの魔術は音声をうまく拾えないので、二人の会話は拾えていない。しかし、映像だけでも異常なことが起こっているのはわかり過ぎた。
　装備者が負傷しているのに作動しないウィルの判定機。一組の秀才が行う銃による攻撃。
　尋常な試合運びではないことは誰の目にも明らかだった。試合を中止すべきだという声すら聞こえる。

　その中で、九組の面々は比較的落ち着いていた。落ち着いているどころか明らかに冷めた目をしているものまでいる。
　どうせ、ウィルがまたなにかしたんだろ。
　ウィルの奇行には慣れているのでそんな雰囲気があった。
「しっかしホントよくやるね」とレイス。
「うむ。作戦よりもあの執念のほうが尋常ではないな」とタケイ。
「いや、さすがに止めるべきではないか」とカイト。
　カイトの発言を受けて、九組の生徒たちも試合を中止にするべきであるか、否かという議論を始めた。
「止めちゃダメ。止めちゃダメよ」
　メアリーが珍しいくらい大声で叫んだ。普段のメアリーなら真っ先に止めに入りそうなものだが、その眼は真剣に試合の続行を訴えている。
　例え、どんな結果になってもウィルには最後までやり通すべき理由があるということだけをメアリーは知っていた。

　ウィルは服を破いて傷口を縛り上げた。散々地面を転がったので綺麗な布とは言えないが、出血を止めることが最優先だ。
「くそ……やりやがったな」
　遠くで爆音がする。一度だけではない。二度三度と枝葉を揺らすほどの轟音。それは次第に近づいてくる。
「あぶりだす気か」
　付近の木に風穴があいた。ウィルのほうへ倒れてくる。
　ウィルは倒れてくる木を交わすために、潜んでいた木陰から飛び出す。背後に重量のあるものが落下した鈍い音を聞きながら周囲を警戒。あちこちから、幹の軋む音や枝の折れる音が聞こえる。
　ウィルは木々に押しつぶされないように移動を始める。荒れた地形を進む振動が、肩の傷に響いた。しかし、立ち止まるわけにはいかない。ウィルの小さな結界では大きな木が倒れていた時に身を守ることができない。
　ワンドの当てずっぽうの攻撃が効率的にウィルを追い詰めている。
　明らかに、ワンドに流れが来ていた。
「逃げるか……いや、反撃しないとジリ貧だ」
　平野に追い出されれば、試合の最初に見せた跳躍から銃による空襲で瞬殺される。追い出されなくとも、このままではワンドが全ての樹木をなぎ倒してしまう。そうなれば平野に出るのと同じ。
　身を隠すすべが残っているうちに、奇襲をかけるしかない。ワンドの銃だけでも破壊しなければ勝ち目がなくなる。

　ウィルは弾倉に強化弾を装填する。
「やってやる。成り上がるチャンスなんてそう何度も来ないんだ」
　二つ折りにした銃を元に戻す。
　武器をいつでも使えるようにした直後、機先を制するかのようにワンドの弾丸が目の前を通過する。
「あっぶねえな」
　弾丸が飛んできた方向を見る。ワンドと目があった。
　銃口が交差する。
　ウィルが狙うのはワンドの銃口の少し下。ワンドは結界のサイズや形を制御できるようだが、自分の弾が出る穴だけは作るはず。とは言え、銃口そのものを狙うとウィルの弾丸はワンドの魔力弾にかき消される。
　ウィルはワンドが銃を撃つタイミングを見計らい引き金を引く。
　弾丸はほぼ同時に放たれる。
　ワンドの弾丸がウィルの銃と無事だった方の肩を貫く。
　ウィルの弾丸は傷の痛みが照準をぶれさせたため、狙いを大きく逸れた。
「くそ……」
　ウィルはその場に膝をつく。諦めたつもりはないが、足に力が入らない。二つの銃傷は致命傷ではなかったが、体力を奪うには十分だった。
「まだまだ」
　それでもウィルは顔を上げて立ち上がろうとする。だが、その眼前にワンドが立ちはだかる。
「いいや。終わりだ」
　ワンドはウィルの顔面を蹴り上げた。ウィルは今度こそ崩れ落ちる。
　荒い呼吸を繰り返すだけで、ピクリとも動かないウィルにワンドは銃を突きつける。
「よく粘った。お前は最後まで頑張ったよ。だが……」
　なにかを言いかけたワンドは眩暈を感じてよろけた。膝をつくほどではなかったようで、すぐに持ち直した。
「この銃、思ったより消耗する……本当によくやったよ。もう少しで本当に魔力切れになるところだった」
「意味ねえよ。負けたらなんも意味ねえよ」
　ウィルはやっとの思いで声を絞り出す。
「畜生。なんでこうなるんだ。今度は油断しなかった。自分が特別だなんて思いは捨てた。訓練もした。作戦も立てた。なのに、なんでこうなる」
　ワンドは一向に止めを刺そうとしない。だが、ウィルはその隙を突こうとは思えなかった。すでにその気力もない。
ウィルの心は折れていた。

「所詮、俺たちはエルフィとは違うということだ」
　馴染みの台詞に反応してウィルはワンドを見上げる。何度も繰り返した光景だが、ウィルの目にはいつもの挑みかかるように強力な眼光がない。すべてを諦めた敗者の目をしていた。
　ウィルは奇妙なことに気が付く。
　ワンドもウィルと同じ目をしていた。倒れた対戦相手に銃を突きつけ勝利を確実なものとしたワンドは、そんなことはどうでもいいと言わんばかりの無感動な表情だった。
「ズルして勝つのが嫌だったら、禁術なんて最初から使うなよ」
「そうだな。だが……」
　ワンドはその先を言うのをしばし躊躇った。
「負ければ意味がないだろ？」
　ワンドが躊躇った言葉をウィルが引き継いだ。
「そこだけは意見が合うな。しかし、この虚しさはなんだ。負ければ意味はない。勝っても虚しい。どうすれば良かったんだ？」
「さあな。見当もつかない」
　ウィルは夢想する。ワンドと立場が逆だったら自分はどう思うか。
　やはり虚しく思う気がする。自分の力で得た勝利、六組の生徒を何人か倒せるようになったくらいでは何も変わらなかった。だが、その勝利に御前試合という看板が付いた途端、有名人になった。評価されたのは自身の活躍ではなく、看板のほうだった。出世のための戦いならそれで十分なはずなのに、なぜか虚しかった。
　試合前にエルフィに投げやりだと言われたのはそれが原因だったかもしれない。
「もう疲れた。早く終わらせようぜ」
「ああ。本当に変なところで意見が合う」
　ワンドは改めてウィルに銃を向け、引き金に指をかけた。

６．

　―――契約違反だ。

　引き金に指をかけたワンドの頭の中にそんな声が響いた。
「なんの話だ？」
　ワンドはその声はウィルのものだと思った。その場にはウィルと自分しかいないからだ。しかし、ウィルはワンドの問いかけに首を傾げている。

　―――契約違反だ。
　―――失くした可能性の不正利用。

―――違約金をいただく。

「誰だ？　なんの話をしている？」
　頭の中で響く声に狼狽するワンド。尋常ではないワンドの様子に疑問を持ったウィルが声をかける。
「おい。さっきから一人で何を言っているんだ？」
「声がする。頭の中で声がするんだ？」
　明らかに狂った人間の物言いをするワンド。ウィルは先ほどまで殺されかけていたのにも関わらず心配になった。
「さっきから何を一人で……」
　ウィルが声をかけた瞬間、ワンドの腕が水を入れた皮袋のように膨れ上がる。皮膚の色も青紫に変化して、まるで骨折したまま放置されたようだった。
「今度はなんだ？　新しい魔術か何かか？」
　肉体の変化は腕だけで収まらない。腕から胸。そこから、腹と首に広がる。浸食は下に進む方が早かった。足のつま先まで膨れ上がった後、顔と頭までもが同じように膨れ上がった。
　ワンドの体格は倍以上の大きさになった。四肢も胴も分厚く醜い肉で覆われ、貴族の嫡子に相応しい細面はカエルのよう。それにもかかわらず、口からは牙が覗き、手足の先には不自然なほど大きな爪。
ウィルが知っているどんな生物にも似ていない姿。突然の事態にその異様を呆然と見上げるしかできない。
ワンドだった怪物はカエルのように跳び出た目玉をせわしなく動かしている。周囲の状況を確認しているようだ。
目が合った。
くるくるとそれ自体が独立した意識を持っているかのように蠢いていた目の片方がウィルを捉えた。ウィルは咄嗟に立ち上がる。怪物はその動作に反応して腕を振るった。ウィルは濁流に飲み込まれた小枝のように地面を転がった。
「痛ってえ……よく跳ばされる日だ」
　ウィルは体の状態を確認する。足は動く、肩の傷が痛むが腕はまだ動く。細かい傷と打ち身は無数にあるが深手は肩だけだ。幸いなことにあの大きな爪による傷はなかった。だが、弾帯がなくなっている。
「爪に引っかけたか。高かったのに」
　銃を破損した以上は役に立たないものだが、ウィルの貧乏性が脱落した装備の行くへを気にする。
　弾帯は怪物の足元にあった。怪物は弾帯を爪の先でつまみ上げる。値踏みをするように弾帯を眺めた後、パスタをすするように弾帯を口に入れた。

「く、食ったあああ？」
　怪物は弾帯を咀嚼する。当然、火薬が暴発する。口内での爆発したことにより、威力は全て怪物の頭を吹き飛ばすために作用した。
　ウィルは怪物を眺めているしかできなかった。まるで幼子のような行動の意図が全く読めなかったからだ。
「とりあえず、倒した……ということにしていいのか？」
　いずれにしても頭を失っては生きてはいないだろう。細かいことを考える余裕のないウィルはひとまず緊張を解いた。
　だが、息をついたのもつかの間、首の肉がワンドが変化した時のように蠢きだす。肉はぶくぶくと膨れ上がらり頭部を再生した。
「冗談だろ」
　ウィルのつぶやきが耳に入ったのか、怪物がウィルのほうを見る。しかし、すぐに興味を失くしたように視線を逸らす。怪物はしばらくの間、出現した時のように周囲を探っていたがやがてある一方向を見つめるようになった。
「あっちは校舎の方……なにを探しているんだ？」
　怪物は校舎のほうを向いたまま大きく口を開ける。
　雷のような強く一瞬の光。
　それは怪物の口から放たれた魔力弾によるものだったが、光が強すぎてウィルには視認できなかった。しかし、見ずとも魔力弾による攻撃だとわかった。校舎のある方角から、さんざん聞かされた爆音がしたからだ。
　光に眩んだ目が視力を取り戻すと、森の中に校舎に通じる道が出来ていた。怪物の放った魔力弾が全ての障害物をなぎ倒して視界が開けていた。煙を上げている建物が見える。着弾したのだ。演習場は流れ弾が当たらないよう十分に距離を取った位置にあるのに、遮蔽物による減衰もものともせずに校舎を破壊した。
「おいおい。大丈夫なのかよ」

７．

　ウィルが二度目の銃撃を受け、ワンドに追い詰められている時だった。
　メアリーは涙目になりながらも映像から目を離さない。両手で嗚咽を抑え込みながらウィルの戦いを見ている。ウィルには一緒にいられないと言われたが、メアリーの気持ちは変わっていない。せめて彼の戦いを見届けたかった。
　周囲もいつの間にか静かになっていた。食い入るように試合の行方を見ている。落ちこぼれの見せる意外な奮闘と執念にすっかり呑まれていた。
　そして、全員がワンドの変質を目撃した。状況への理解が追いつかなかったので、その瞬間のパニックはなかった。

まだ全員が映像を見ている。おかげで怪物が魔力弾を放ったとき、その矛先が自分たちのほうを向いていることに誰かが気が付いた。
「伏せろ」
魔力弾は直撃ではなかったが、近くに着弾したらしい。着弾の衝撃が振動となって伝わり、扉や窓から爆風が吹き込んでくる。
映像はまだ維持されている。怪物の動向を探るために視線が集まる。怪物は進行を始めていた。自分の魔力弾でできた道を通って校舎へ向かっている。
「こっちに来るぞ」
その叫び声がきっかけになり、パニックが始まった。講堂中が悲鳴で満たされる。将来、戦場に立つとはいえ、今は素人集団だ。非常時の対応には難があった。
「落ち着け。教員に従い避難しろ」
ミラの声だ。教官の一喝により生徒たちは統制を取り戻す。教官の誘導に従い出口に向かう。
その中で、メアリーだけがその場を動かず映像を見続けている。
「おい。行こうぜ」
レイスが呼びかけるが、メアリーは動こうとはしない。ジッと映像を見つめている。
映像の中ではウィルが怪物を追いかけようとしていた。
「アイツ、やる気なのか。どうかしてるぜ」
レイスが呟いたとき、映像が途切れた。避難の妨げになると気が付いたミラが魔術を解除したのだろう。
「ほら、行くぞ」
レイスが一向に動こうとしないメアリーの腕を引こうとするが、メアリーはレイスの腕を振り払った。
メアリーは誘導とは別の出口に向かい走り出そうとした。しかし、その前に立ちはだかるものがいた。
「どこに行くのかな？」
エルフィだった。パニックの中でも涼しい顔をしている。
「どいてよ」
例え最強の彼女が相手でも譲らない。そんな決意を秘めての一言だったが、エルフィは意外なほどあっさり道を開ける。
「いいよ。ウィルのところに行くんだろ。でも、僕も行く」
二人は視線を交わし合ってうなずき合った。通じるものがあったのか二人で出口に向かう。
「待てよ。あんな奴ほっとけばいいだろ。自分勝手にやって、一人でくたばるんなら面倒みる必要もない」
メアリーは足を止めて振り返った。クラスメイトが心配して止めようとしてくれている

なら理由くらいは説明するべきだと思ったからだ。
「僕は先に行く」
　エルフィはメアリーの心境を察したが先を急ぐことにした。エルフィが九組の生徒に対して義理立てする必要はないし、それはメアリーが一人でやるべきことだからだ。
「俺たちは行くべきじゃない。助けに行く義理はないし、どうせ行ったところでなにもできない」
　いつの間にかレイスの後ろに九組の生徒たちが集まっていた。いつまで経っても避難してこないメアリーを心配して引き返してきた。
生徒たちは話の成り行きを黙って見守っている。概ねレイスの言い分に同意だったからだ。
メアリーは自分を見る三十人ほどの生徒を見返す。それだけで相当のプレッシャーを感じた。これを相手にものを言うのは一苦労だ。いつも見上げていた壇上に立つウィルの姿を思い出す。
メアリーはゆっくり息を吸い込んだ。

８．

怪物が校舎のほうへ歩いていく。
ウィルは怪物の行動原理を推理していた。強化弾の詰まった弾帯を食べようとして頭を吹き飛ばされた後、ウィルを無視して校舎へ向かう。
「強い魔力に引かれている……まさか、魔術師を食う気か？」
　次に校舎にいる魔術師たちがどう動くかを考える。生徒たちがいるのだから避難をするだろう。皇子の付き人たちも皇子を怪物から遠ざけるように動くはずだ。
　避難が終われば、教官や皇子の護衛たちが怪物に対処するために引き返してくる。どちらも学園で言えば一組クラスの魔力の持ち主だ。ウィルが何もしなくても怪物は討伐されるだろう。
　だが、怪物が今、魔力弾を放ったらどうなる？
「巻き込まれたら、ほとんどの生徒は死ぬ」
　考えている間にも怪物は前進する。
「せめて避難が終わるまで学園から意識を逸らさせないと。だが……」
　自分の状態を確認する。両肩に銃創。腕は動くが、格闘には使えそうにない。他の傷は数こそ多いが、戦いに支障のないレベルの軽傷だ。武器は破損。魔力も残りわずか。準備した奇策もない。
　あの怪物相手に勝ち目があるとは思えない。
「もっともフル装備だったとしてもあれはきつい」
　考えるまでもなくこのままやり過ごすべきだ。勝ち目の薄い戦いならいざ知れず、ゼロの戦いはするべきではない。

　そんなことはわかりきっているはずなのに、次に怪物が一歩踏み出した時、ウィルもまた一歩踏み出した。
　怪物が前進するごとにウィルも前進する。
「おいおい。俺はなにをしているんだ」
　勝ち目はない。勝ち目はない。満身創痍で装備もない。闘志だって潰えたはずだ。
　だというのに足は止まらない。

―――だったら、どうして戦う道を選んだの？

　不意にメアリーの声が頭の中に響いた。
　あの時は質問に答えられなかった。今も思い出せない。魔力検査の後逃げるように田舎に帰った後で、なにがきっかけで上に行こうなんて思った？
「わからない。わからないけど……」
　いつの間にか折れたはずの心にもう一度火がついていた。
　ここでなにもしなかったら、大事な何かを失う気がする。たった今折れた心に火をつけたなにかが無くなる気がする。きっとそれは昔挫折した時にも立ち直させてくれたはずのものだから失くすわけにはいかない。
「……というかだな」
　ウィルは魔力による身体能力の強化を行い怪物を追いかけた。
「魔力なら俺も持ってるんだよ」
　怪物の頭部をめがけて飛び蹴りを放った。頭部を破壊しても殺せないことはわかっているが、どの道どの部位を狙ってもウィルには怪物を殺しきることはできない。足止めのために最も有効なのは頭部に衝撃を与えて、脳震盪のひとつでも起こさせることだ。
　ウィルの蹴りが怪物の後頭部に直撃する。強化した脚力とそこの固い軍靴による頭部への蹴り。普通の人間なら殺しかねないレベルだが怪物は怯んだ様子もない。
「チッ……まだまだ」
　ウィルは怪物の肩に飛び乗った。そこを足場にして、怪物の頭を何度も踏みつける。
「うらあああああああああああ」
　執拗な踏みつけもダメージを受けた様子がない。しかし、さすがに煩わしく思ったのか怪物は虫を払うような動作でウィルを打ち払った。虫を相手にするような身の入っていない動作でも怪物が行えば暴風のような膂力を持つ。ウィルはあっさりと怪物の肩から転げ落ちる。
「怯みもしない」
　虫一匹を払うためには足を止める必要すらない。ウィルの抵抗は全く成果を上げていなかった。
「狙いを変えるか。頭がダメなら―――膝」

　ウィルは怪物のひざの裏を狙い蹴りを放つ。全身全霊をかけた膝蹴りにさすがの怪物もよろめいた。
　怪物がウィルのほうを振り向く。凶悪な爪を持った腕を振り上げる。
「……来るか？」
　怪物がウィルに向かい爪を振り下ろそうとした時、植物の蔦が怪物の腕に絡みつきその動きを制した。
「エルフィか」
「一旦下がれ。後は僕がなんとかする」
　エルフィは軟膏の入った小瓶をウィルに投げた。小瓶を受け取ったウィルは怪物から離れた。
「無理するなよ」
「君が言うことではないな」
　エルフィは地面に魔力を流した。周囲のまだ生きている植物を支配下に置く。エルフィの魔力による操作は植物を武器にする。無数の根が先端を針のように変化させ地面を突き破り、怪物の足を刺す。前後左右、あらゆる方向から針を刺され怪物は地面に縫い付けられた。
「捕えたぞ」
　片腕と両足を押さえて、足止めは成功したように思えた。しかし、怪物の腕が力ずくで蔦を引きちぎった。
「なんて力だ。だが、足は止めた。無理に動けば千切れるぞ」
　はったりではない警告。複雑に縫い付けられた状態で、無理に引き抜けば確かに足は千切れるだろう。
　しかし、それで足を止めるのは普通の生き物だけだ。
　怪物は強引に縫い付けられた足を引き抜いた。ブチブチと肉がちぎれる音がして、足を失った怪物が倒れた。一見、足止めとしては十分な損傷。だが、怪物の足は傷口を塞いでいた針が無くなったことで再生を始めた。
　わずかな時間で怪物は再び両足で立ち上がった。
「なんてやつ。だったら……」
　エルフィは胡桃大の種を三つ地面に巻いた。タネは瞬く間に怪物と同じ高さの木に成長する。
三本の木は根っこを動物の足のように動かし歩き出し、枝を腕のように降り回し怪物を殴りつける。同じ体格からの殴打を受けて、怪物も怯んだが決定打にはならない。攻撃の間隙を突き、爬虫類のような俊敏さで歩く木の一体に牙を突き立て、幹を齧り取る。幹の大部分を削り取られた歩く木は二つに折れそのまま動かなくなる。
残り二体は怪物が同胞に噛り付いた隙を無駄にはしなかった。一体が怪物に圧し掛かり動きを封じようとする。もう一人が動けない怪物に殴り掛かろうとする。しかし、怪物は歩

く木を背に乗せたまま立ち上がる。その場で回転して振り落す。
怪物と歩く木の一騎打ち。同時に腕を振り上げるが、怪物の振り抜きのほうが早い。歩く木は幹を爪で切り裂かれ、倒れ動かなくなる。
怪物は先ほど振り落されたまま立ち上がらない最後の一体の幹を踏み抜き止めを刺した。
「クッ……」
　エルフィは驚愕で目を見開く。しかし、すぐに次の行動を起こす。先ほどよりもさらに一回り大きいタネを巻く。
「……でかい」
　傷に軟膏を塗りながらエルフィの戦いを見ていたウィルは思わずつぶやいた。エルフィが出現させた巨木は、離れたところにいるウィルですら首が痛くなるほどの角度で見上げなければならないほどの大きさだった。
　巨木は根を足のように動かし怪物を蹴り飛ばした。怪物は出現した場所よりも後ろまで転がされた。
　さらに巨木は追撃をかけようとする。歩くごとに地響き。動きは鈍いが一歩が大きい。
　巨木が怪物に迫る。
『――――――――』
　怪物が文字に出来ない叫び声を上げる。同時に雷のような閃光。
　再び放たれた怪物の魔力弾は巨木にすら風穴を開けた。巨木の幹は身長に見合った太さだったが、その大部分を削られて二分割されてしまった。幸いなのは、怪物が巨木を見上げていたため魔力弾が上に逸れ、二次被害がでなかったことだけだ。
　巨木の上の部分が落ちてきた。地面が揺れた。
エルフィはその揺れに耐えられず尻餅をついた。同年代に自分以上の使い手がいなかったエルフィはここまでやり込められたのは初めてだった。
怪物が前進を再開する。エルフィは腰を抜かしたまま動かない。呆然と怪物を見上げていた。
「エルフィ、逃げろ」
「……あ」
　怪物がエルフィを爪の間合いに捉える。エルフィはまだ逃げられない。何度も立ち上がろうとするがよろけてしまう。
「ええい。なんて心の弱い奴だ」
　ウィルはエルフィへ向かい走り出す。怪物が腕を振り上げる。
　ウィル、魔力による身体能力の強化を開始する。残りの魔力を一度に使ってしまえば、一気にエルフィのところまで跳べる。一瞬、後のことを考えたが、迷いを振り切り魔力を全開にさせた。
「儘よ」
　ウィルは怪物とエルフィの間に割って入った。

９．

　メアリーは貴族の娘と言えど、末っ子だったので人前に立った経験はほとんどなかった。口を開いた途端に、プレッシャーで口が渇く。だが、一人で怪物に立ち向かおうとしたウィルの姿を思うと力が湧いてくる。
「ウィルはすごく自分勝手だったと思うよ。でも……じゃあ、みんなはどうしてウィルと一緒に戦おうと思ったの？　付き合いでエルフィに特攻したり、囮になったりしたの？」
「そ、それは……」
　メアリーの問いにすぐに応えられるものはいなかった。判定機の結界、演習における安全装置を破壊できる使い手に付き合いで立ち向かえるわけがない。だが、その時の気持ちをうまく言葉にできなかった。
「私は感動したから。ウィルの言葉と戦いに感動したから着いていった。でも、それは私が勝手にそう思っただけ。ウィルが自分勝手に戦って、自分勝手に死にかかってるのと同じ。だから、ウィルがどんなに自分勝手でも関係ない。私は私の目的のために戦いに行く」
　メアリーはそれだけ言い切ると踵を返す。
「みんなはどうなの？　魔力がないことを言い訳にしてずっとなにもしないで、戦う理由も、戦わない理由も、誰かのせいにするの？」
　答えを待たずにメアリーは走り出した。講堂には残りの九組の生徒たちだけが残っていた。
「……だってよ。どうする？」
「自分で考えることだな。俺は行く。鉄の魔術は奴がいないと役に立たないからな。自分の能力を役立てられる場所は重要だ」
　タケイの魔術は周りに魔術師しかいないとほとんど無意味だ。盾も刀も魔力で作ったほうが上等なものができる。
「そういうのも相手を利用するってことになるのかね。俺たちを利用した奴を利用し返してやるのも面白そうじゃないか」
　レイスはタケイの後を追った。ウィルの、レイス自身でも考え付かない方法で、レイスの魔術を活かす作戦は面白かったからだ。
「なにをしている。早く避難しろ」
　教官の怒鳴り声が響いた。迷っている時間はないようだ。
「急ぐぞ」
　カイトは教官のいる方へ走った。
「おい。いいのかよ？」
　ウィルと特に仲の良かったカイトが避難経路へ向かったので、誰かが呼びとめようとした。

「行くにしても、戦略が必要ということだ」

１０．

　エルフィと怪物の間に割って入ったウィルは怪物の一撃により宙を舞った。爪により裂傷を負ったのか空中で回転しながら血をまき散らしている。
　ウィルは受け身も取らず地面に落ちて動かなくなった。
「ウィルウゥゥゥゥゥ」
　エルフィの悲痛な叫びにも反応しない。エルフィはウィルの生存を確かめるため、ウィルに駆け寄ろうとする。
　怪物はエルフィを追いかけようとする。
「邪魔をするな」
　エルフィは小さな種を投げた。タネは空中で一本の杭へと変化して怪物の喉に突き刺さった。
「ウィル、しっかりするんだ」
　エルフィはウィルを抱きかかえて体を揺するが、ウィルは反応を示さない。
　怪物は喉に刺さった杭を自分で引き抜き、再生を待たずにエルフィに向かう。重傷者を抱えて動けないエルフィに爪を振り下ろそうとする。
「ここまでか」
　エルフィはウィルを庇うように抱きかかえて目を閉じた。だが、怪物の爪は一向に襲ってこない。
恐る恐る目を開けると怪物は腕を振り上げたまま、首をきょろきょろとさせていた。
怪物の目が蠢く。
怪物はしばらく何かを探すようにしていたが、やがてエルフィにはなにもせず校舎のほうへ向かい歩き出した。
「……これが君の魔術か」
　エルフィのすぐ後ろにレイスがいた。怪物の不可解な行動は、気配を消す魔術で認識を撹乱した結果だった。
「なるべく静かにしてくれ。どのタイミングで気付かれるかわからない」
「すまない」
「とりあえず、ウィルをひっこめるぞ。なるべく静かに」
　エルフィとレイスはまだ残っていた森の木陰にウィルを避難させた。そこではタケイとメアリーが待機していた。
「僕の軟膏を傷に塗るんだ」
「その必要はありませんわ」
　この場に不釣り合いな柔らかい声。エルフィが振り向くと一組の回復役、ナナイがいた。

「君も来てくれたのか」
「ええ。必要かと思いまして」
　ナナイはウィルの体に触れて、魔力を流し込んだ。ウィルの体が淡い光に包まれる。光が収まるとウィルの傷は塞がっていた。
「これで大丈夫です。消耗した魔力と体力は戻りませんが休めば大丈夫です」
「避難状況はどうなっている？」
「教官寮へ全員を収容した後、結界の敷設を行う予定ですが、まだ収容が終わっていません」
「では、まだ時間稼ぎをする必要があるな」
　五人は怪物を見た。怪物は悠々と歩いている。エルフィが与えたダメージはすっかり治癒していた。
「あれと戦うのか……」
　レイスは頬が引きつっていた。タケイも難しい顔をしている。勢い込んで出てきたがなにか策があるわけではなかった。
「僕が前に出るから、危なくなったらさっきみたいに助けてくれればいい」
「女子にそこまで言われたら……」「うむ。行くしかないな」
　レイスとタケイは向かい合って頷き合った。
「私も……」
「メアリーとナナイはウィルのことを診てやってくれ」
「でも……」
「わかりましたわ」
　着いていこうとするメアリーの肩をナナイが抑えた。それを確認するとエルフィ、レイス、タケイは森から飛び出して怪物の前に躍り出た。
「近くで見るとデカいな」
「レイス、あまり目立つと隠れられなくなるんじゃないか？」
「そうだね。もう黙ります」
　怪物は目の前に現れた三人を観察する。先ほど、見失った大きな魔力の持ち主を見つけて睨みつける。
「僕狙いか。今度こそは」
　エルフィは十体以上の歩く木を出現させた。
一体を正面から突撃させる。怪物は自らも体当たりを仕掛ける。力においては怪物が勝っている。歩く木は小麦の穂のように押し倒された。
その隙に二体を背後に回り込ませる。抑え込みを仕掛けるが、怪物は見た目に合わない俊敏さで前方に跳躍。別の個体が怪物の着地するタイミングで殴り掛かる。しかし、打撃は有効打にならない。爪による反撃で切り裂かれた。
「これを使え」

　タケイが魔術により鉄板を生み出す。エルフィは歩く木たちに鉄板を盾として装備させた。
　歩く木たちは鉄板を前面に押し出し怪物を取り囲む。四方から鉄板を押し付けて動きを封じようとする。
怪物は爪を振るって抵抗。しかし、鉄板に爪痕を残しただけで包囲を破る前に押さえつけられる。
さらに残りの歩く木が何重にも折り重なり、包囲網を固め怪物の動きを止めた。
「よし。このまま援軍が来るまで押さえ続け―――」
　閃光。
　光の柱が包囲網の一点を突き破った。
　包囲網の穴から怪物が顔を出す。包囲網を突破した怪物は密集する歩く木に魔力弾を放つ。集団の中心に着弾し、爆風で全ての歩く木を薙ぎ払った。
「あれをなんとかしないと」
「しかし、あの威力だ。俺の鉄板でも撃ち抜かれるとなると」
「ウィルみたいに魔力切れまで逃げ回るか？　俺の魔術で隠れてもあれだけ攻撃範囲が広いと巻き込まれるぞ」
「そもそも、あれを校舎に向けて撃たせないための時間稼ぎだろ。それでは意味がないよ」
　怪物がエルフィたちのほうを向いて、口を大きく開いた。
「下がれ。僕の後ろに」
　エルフィはタケイとレイスを庇うために結界を展開する。
「正直、防ぎきれる気がしないわけだが」
「そんなこと言うなよ、一組のくせに」
　怪物が魔力弾を放つ直前、エルフィと怪物の間に大量の指輪が投げ込まれた。
　眼が眩むほどの光と共に怪物の魔力弾が放たれる。
　魔力弾はエルフィの結界にぶつかる前に、エルフィと怪物の間に突然出現した無数の結界により威力を減じられた。そのおかげで、エルフィは怪物の攻撃を防ぎきる。
「あの指輪は判定機か」
「そういうことだ。倉庫から持ち出してきた」
「カイト。それにみんなも」
「なんだい。九組は全員来たのか」
　人数が三十人余りになったところで、構成のほとんどは落ちこぼれの九組。彼我の戦力比は大きく変化していない。
　エルフィはそれでも随分と力強く感じた。

１１．

―――それだけか。

その言葉は今まで神童として扱われていたウィルの自尊心を打ち砕くには十分だった。あんなに粗雑な扱いを受けたのは初めてだった。あんなに興味のない目で見られたのは初めてだった。
惨めだった。悔しかった。恥ずかしかった。貧困の村から抜け出せないのかと思うと、飯時でもないのにひもじい思いがした。人をあんな目で見られる他人がいることが恐ろしかった。
ショックのあまり現実感が欠けて、心が空っぽになった。
次の子供が検査を受ける様子が、演劇を見るみたいに遠い世界のことだと感じた。
だが、次の瞬間、現実に引き戻される。
「―――綺麗だ」
その言葉は無意識のうちに口からこぼれた。
ウィルの次に検査を受けた彫刻じみて容姿の整った女の子が、冬の町に咲かせた春の花はそれほどまでに美しかった。寒い街のすべてを温めることのできる暖炉の火のようだった。
その火は空になったはずの心にも燃え広がる。
試験官の言葉も、村の貧困もどうでもいいことのように思えた。
神童なんて呼ばれなくてもいい。
貧しくたって構わない。
今、この胸の中にある火を追いかけていけるなら、他のものはもうなにもいらない。怖いものなんて何もない。
ウィルはエルフィの魔術に感動して―――

―――その感動を追いかけた。

１２．

よい夢を見たはずだったのに、やけに体が重たかった。寝不足なのかと思い二度寝の欲求が湧いてきたが、今の気持ちを忘れたくなかったので我慢した。
「ああ。思い出した。なんでこんな大事なことを忘れてたんだ……」
メアリーの問いに対する答えはこれだった。
何度も負けて傷つき、怖い思いもした。そのうちに嫌なことばかりだけを思い出すようになってしまったが、心の底ではまだあの時の燃えカスがくすぶったままだった。
「エルフィがあの女の子だったのか」
「ウィル、起きたの？」

「メアリー？　なんで俺の部屋に……じゃない。怪物はどうなった？　エルフィは？」
　ウィルは慌てて立ち上がろうとするが、足に力が入らず前のめりに倒れた。
「しっかりして」
　メアリーがウィルに寄り添う。今のウィルはメアリーでも押し倒せそうに思えるほど弱弱しかった。
「まだ動いてはいけませんよ」
「ナナイ？　お前まで来たのか」
　のんびりとした声に振り向くとナナイがいた。ウィルは先ほどの夢がナナイの魔術により精神になにかしらの作用がもたらされた結果だと気付く。
「まあ、いい。状況は？」
「まだ戦ってるよ。エルフィとみんなが」
「みんな？」
　ウィルが戦いの音がするほうを見ると、馴染みの顔をいくつも見つけることができた。
「お前ら、なんで来た」
　ウィルの叫びに何人かが振り向いた。
「ウィルが目を覚ましたぞ」
「お前らじゃ無理だ。下がれ」
「知るか。ほっとけ」「お前のためにやってんじゃないんだぞ」「すっこんでろ」「そうだ。すっこんでろ」「というか、お前に言われたくない」
「く……」
　ウィルは言い返そうと思ったが、今の体調では叫ぶだけでも息切れを起こす。
「今は無理しちゃダメよ」
「そういうわけにはいかない」
　ウィルは手を膝について立ち上がる。眼前ではエルフィとクラスメイト達が怪物に散発的な攻撃を仕掛けている。
「あんな戦い方じゃダメだ」
　九組の一人が怪物の腕に薙ぎ払われた。遠目に見ても血が飛び散ったのが見えた。
「いけない」
　いつもゆったりとしているナナイが焦った様子で飛び出していった。倒れた生徒に治癒をかけているようだが、魔力に反応した怪物がその背中を狙う。
　ギリギリのところで、エルフィの歩く木が割って入る。
「早めに終わらせないと……このまま時間を掛けたら、死人が出る。それじゃあ、勝ってもうれしくない」
　ウィルの言葉を聞いたメアリーは心が軽くなるのを感じた。一生利用され続ける羽目になっても付いていく。そんな悲壮な決意すらして出てきたのだが杞憂だと知れた。
「できるのね？」

「ああ。戦う理由、やっと思い出したんだ」
　負ければ意味がない。でも、勝っても虚しい。
　では、どうすればいい？
　そんな状況は勝負所を間違えている。
「やることは変わらないんだがな―――勝つぞ」
　勝ったときに側にいてくれる誰かに、あの日ウィルの胸に灯った火と同じものを与えられるやり方で。
「奴を仕留める」

　ナナイを庇った歩く木は一撃で倒された。ナナイは自分の結界で怪物の攻撃を防ぐが、治療をする余裕がなくなる。倒れた生徒からは今も血が流れ続けている。怪物の背後から九組の生徒たちが攻撃を仕掛けが、小さな傷をつけるだけで怪物を止めることができない。
「僕がやる。下が――――」
　エルフィは大きな攻撃を仕掛けようとしたが、眩暈を感じ攻撃は不発に終わった。
　レイルがナナイに近づき存在感を消す魔術を使用した。怪物はナナイの存在感が薄くなったことで、背後からの攻撃に気を取られナナイへの攻撃を止めた。
　しかし、ナナイが倒れた生徒の治療を始めたとき、怪物は再びナナイのほうへ振り向いた。
「治療を止めろ」
　ウィルの叫び声を聞いてもナナイは治療を中止しない。表情から指示に対する困惑がうかがえる。
「やつは魔力に引き寄せられる。先に移動しろ」
　治療を中止すると怪物はナナイへの攻撃を止め、背後からの攻撃への対処を始めた。ウィルの意図を理解したレイスとナナイが怪我人を担いでウィルの位置まで下がった。
　ナナイは治療を再開。生徒の傷はすぐに塞がった。
「カイト、お前もこっちに来い」
「どうする気だ？」
　後ずさろうとしたタケイが怪物の前で小石に躓き転倒した。
「引っ張れ」
　カイトはその一言でウィルの意図を理解する。カイトは魔術により伸ばした腕でタケイの襟を掴み、怪物の爪が届かない場所まで引きずった。
「無事か？」
「忝い。もう一度行ってくる」
　無傷で怪物から逃れたタケイは再び攻撃に参加する。カイトも続こうとするが、ウィルに呼び止められた。
「カイトはそのまま撤退の援護だ。ナナイもここで治療を」

　これで即死でなければ助けられる。しかし、怪物の攻撃力を考えるとこれでもまだ危険すぎる。
「三組に分かれろ。正面にいない奴だけが攻撃を」
　怪物は血を流すほどの攻撃を受けると、間近で別の魔術師が大きな魔力を使わない限りは、それに対処しようとする。
怪物の背後から攻撃して振り向いたら中止。別のチームが攻撃、それに対処しようとしたら、別のチームが交代する。さらに、チームを三つに限定したことで誰が攻撃を受けるか予想しやすくして、カイトの仕事の成功率を上げる。
「これでしばらく持つはずだ」
「……すごい。安定してるよ」
　先ほどまで、いつ誰が怪物の餌食になるかとひやひやしていたが、今は安心して見ていられる。愚連隊のようにバラバラに突撃して返り討ちに遭うだけだった生徒たちが、ウィルの指示により統制のとれた軍隊のようになっていた。
　だが、怪物には大きな武器が残っている。
　大きく口を開け魔力弾を撃つ気配を見せた。
「判定機は？」
「さっきので全部だ」
「なら、僕が―――」
　エルフィが九組の生徒たちの前に出て、結界を張ろうとする。しかし、自分でも明らかに魔力が消耗して弱くなっていることが分かった。
「これでは防ぎきれない」
「正面から受けるな。足を狙え」
　ウィルの指示を受けたエルフィは、タネを杭に成長させ怪物の右足を貫いた。バランスを崩した怪物の魔力弾は狙いを逸れて、なにもない空中へと撃ちだされた。
「やった」
　攻撃を凌いだエルフィが歓声を上げる。
「さすがにうまいな。だが、何度も使えない手だ。急がないと……メアリー、来てくれ」
　ウィルはふらつきながらも移動しようとする。メアリーは慌ててウィルに肩を貸した。男子の中では小柄なウィルだが、メアリーにとっては大柄と言えた。筋肉質な少年の体重がメアリーに圧し掛かる。
「どっちに行くの？」
「あそこだ。ワンドが怪物になった辺りだ」
　ウィルに肩を貸したメアリーは半ば引きずるように、ウィルを移動させる。
「すまん。重いか？」
「平気。私、役に立たないもの。これくらいしないと」
「そうでもない。最後はメアリーが頼りだ」

「私が？」
　ウィルとメアリーは目標地点に到達する。ウィルは辺りを見渡した。
「あった。あれだ」
　ウィルの視線の先には小さな銃があった。ワンドが使っていたものだ。
　ウィルは銃を拾い上げ、メアリーに手渡した。
「これで奴を撃て」
「私が？　無理だよ。ウィルが撃った方が」
「これは使用者の魔力を吸い上げて攻撃する銃だ」
　頭を吹き飛ばしても再生する怪物に小さい攻撃をいくら当てても無駄だろう。一撃でチリも残さないほどの攻撃を試みるしかない。
　エルフィが消耗して、ナナイが治療で手が離せないなら、この場でそれが可能な魔力を持つのはメアリーだけだ。本来なら、メアリーが怪物を吹き飛ばすほどの大きさの魔力を使えば、撃つ前に鼻血を噴いて倒れるのが落ちだ。しかし、禁術により攻撃の魔術が封じられていたワンドにさえ強力な魔力弾が撃てたのだから、魔力のコントロールができないメアリーにもできるはずだ。
「メアリーが撃つしかない」
「でも……」
　メアリーはこれまで銃を撃ったことがなかった。九組全員が銃を持った六組との演習では、出場停止を喰らっていたので銃を撃つ機会がなかった。
　この土壇場で大役を任せるには経験が足りなさすぎる。
「大丈夫だ。ちゃんと教える」
　ウィルは銃を持つメアリーの華奢な手に自分のマメだらけの手を重ねる。魔力を使う銃は普段ウィルが使っているものに対して、随分と小ぶりだったがメアリーの小さな手の中にあると大仰に感じた。
「わかった。やってみるよ」
　メアリーは銃口を怪物に向けた。しかし、銃身が震えているし、メアリーの構えは腰が引けている。
「しっかり腰を入れて、少しだけ前傾に。膝を軽く曲げる。ものを押すみたいなイメージで」
　言われた通りの構えを取るが、まだ手が震えていた。初めての射撃がいきなり実戦、それもクラスメイト達の命を預かる一撃では緊張で手が震えても仕方あるまい。
　ウィルは背中から、抱き着くようにして、手を回しメアリーと共に銃を構える。
「う、ウィル」
「集中しろ。次は照準を合わせるんだ」
　震える銃口が怪物を追いかける。
「なんとなく銃を向けるだけじゃダメだ。銃の上についてる突起、わかるか。後ろの二つ

の中心と、先端の一つと、怪物を一直線に並べるんだ」
「うん。やってみる……ダメ。動いて狙いが付かない」
「エルフィ、三秒でいいからやつを止めろ」
「君ら、なんでそんなにくっついて……まあ、いい。これで最後だぞ」
　エルフィはありったけの魔力を地中に流した。針のような根が無数に地面から突き出てくる。怪物の両足を貫き、地面に縫い付けた。
　ウィルはメアリーの手を強く握った。メアリーの震えが止まった。
「今だ。撃て―――」
　メアリーが引き金を引く。

　その瞬間、ウィルは醜い化け物に成り果てたライバルのことを思った。
　きっと自分には彼が禁術に手を出したことを責める資格はないだろう。そもそも、責める気持ちがない。
　ただ残念に思った。
　彼と自分の差はほんの小さな火がひとつあるかないかだけだったのに。
　もう彼と共に走ることがないのだと思うと残念だった。

　メアリーは自分の中に大きな力の流れを感じた。いつもは文字通り嵐のごとく暴れまわるだけのエネルギーが、今は一つの方向へ足並みをそろえて真っ直ぐ向かっていく。自分の中から溢れてくるものを抑えつけなくてもいい。それはとても心地よかった。
　一緒に銃を持っていたウィルも似たような感覚を覚えていた。違うのは力の流れがとても小さいと言うことだ。魔力を吸う銃は枯渇しかかった魔力の最後の一滴まで強制的に搾り取って行った。
　銃口から眩い光が放たれる。
　メアリーの背中が発砲の反動でウィルを軽く押す。
疲れ切ったウィルはたったそれだけで背中から倒れこんだ。
だから、放たれた光がどうなったかを見届けることはできなかった。
だけど、遠くから喝采と歓声が聞こえる。

倒れたウィルの視界の全ては真っ青な空。
空は相変わらず高かったけど、まるで自分がその一部になったような気がした。